君はママの宝物 ⑥

「気になる子」との365日

新垣 道代

むぎの子共同保育園で(下)

「育児は育自」親も成長

息子が2歳4カ月になったころ、むぎの子共同保育園への親子一緒の通園がスタートした。その1カ月後、発達障がいにおける高機能自閉症と診断が下りたので、園に頼んで保護者への学習会を開いてもらい、私と保育士で息子の状況や対応方法を説明し理解を求めた。

私が心がけていたのは、順番が守れない、席に座らずやりたいことをやる、人とかかわらない息子と、子どもたちを結ぶ仲介役の存在。「あのね、彼は今こんな事を考えているんだよ」と息子の気持ちを代弁し、相手の気持ちを汲めない息子に「○君はこんな気持ちなんだって」と伝える。「この子はね、『出来ない』じゃなくて『苦手』なんだよ。だからゆっくりだけど必ず出来るようになるんだよ」

息子を抱いて一緒に登園する私

「ふーん。そうなんだ」。子どもたちは息子の風変わりさを肌で感じ、そのままの息子を受け入れていく。あるとき、お友達の言葉がきっかけで自傷行為や問題行動が出始めたことがあった。周囲との摩擦は経験させ、当人同士がその困難を乗り越えさせることが大事だと思った。だが、それはただ本人任せでは難しい。私が常に付き添って原因を把握している分、家庭でも対応ができ、3カ月ほどで治まった。その間、お友達に「それはしないで」と制限することはなかった。

息子が悪いことをしたらどこでも、誠心誠意相手の子や大人に謝った。子どもは親の背中を見て自分のしたことを理解する。「これはダメだよ」でなく「こうするといいね」と、具体的に気付かせる努力をした。

保育士とのチームワークも大きかった。それぞれの発達段階での保育はプロである保育士から教わり、感覚過敏など障がいから来る症状は私が学んだことを逆にレクチャーした。

発達が「気になる子」だった息子は、集団に入るとさらに、ほかの子との違いが分かった。試行錯誤から道は開けるが、うまくいかないこともある。通園でへとへとになり、夜は寝ない息子と深夜のドライブ。そのまま死んでしまおうかと思うこともあった。

でも、そこで保育士は苦しむ親に全力で寄り添った。保護者はほかの子どもの成長も自分の子どもの成長のように共に喜び涙を流してくれた。親の不安を安易に解消させるのではなく、支えてくれたその中で、子育てっていいね、完璧な親なんていないよねって思えた。育児は育自。ここで成長したのは私自身だった。

(息子どもの未来をつくる親の会連絡会副会長)

H 21.4.1
沖縄タイムス